

あいづちとして用いられる「あ」の機能

古川智樹

キーワード あ・あいづち・談話標識・機能・change-of-state token

1. はじめに

会話例1：被験者として参加したきっかけについての話（NS-A／NS-F）

- 1 NS-A： これ(.) どうやって：この：あれに：
- 2 NS-F： え：っとあたしの友達が：Hさん：の：なんか(.) 英語の授業で一緒になったらしくって：
- 3 NS-A： あ：あ：あ：
- 4 NS-F： それ：のつてで.
- 5 NS-A： あ：なるほどね

会話例1は会話データの被験者になった経緯をNS-Aが質問し、NS-Fが返答している場面である。NS-Fが「英語の授業で一緒になったらしくって：」と発話したところで、NS-Aは「あ：あ：あ：」とあいづちを打ち、NS-Fの「それ：のつてで」と発話したところで「あ：なるほどね」と再度あいづちを打っている。3で用いられているあいづちの「あ：あ：あ：」は、その時点でNS-Fの後の発話を予測し、NS-Fが会話に参加することになった経緯をすでに理解したことを表す機能を果たしていると思われる。3の位置で使われている「あ：あ：あ：」を「うん／はい／ええ」に置き換えると、まだ3の時点ではNS-Fの参加の経緯を理解しているとは解釈できず、ただ「聞いているという信号（堀口1988）／続けてというシグナル（メイナード1993）」という表示になり、また、「ふーん／へー」に置き換えると、「NS-Fの友達が英語の授業で一緒になった」ことに対して興味・関心を示している、あるいは単に聞いているだけでも解釈できるが、NS-Fの参加の経緯を理解したという解釈は難しい。そして、「そうですね」に置き換えると、不自然な会話になり、やはり3の位置で経緯を理解したと表示するためには「あ」でなければならない。このように、「あ」は「うん／はい／ええ」や「ふーん／へー」、「そうですね」などとは異なる、独自の

機能を持っていると思われる。そして、3のように単独で発話される場合もあれば、5の「あ：なるほどね」のように「あ」の後続に他の形式がつく場合もあり、「あ」は様々な位置、形式で会話の中に現れることがわかる。

では、話し手の発話を受けて聞き手が発する「あ」はどのような機能を持つのであろうか。この「あ」に関して、あいづち研究の中では、主に「理解している信号（堀口1997）」として取り上げられているが、「理解」という機能の中に「あ」があるという位置づけで、「あ」という形式が会話の中でどのような機能を持つのかについて明らかにした研究は管見の限り見られない。また、感動詞・間投詞などの談話標識の観点から分析を試みた研究もあるが、作例による独り言、応答の「あ」の分析であり、文脈や会話参加者の相互行為の要素が欠けているものが多い。（以上の先行研究に関しては次節で述べる）

そこで本稿では、実際の会話資料を用い、あいづちとして使われる「あ」に焦点を当て、分析を行った。具体的には、話し手の発話途中、あるいは発話終了後に、聞き手が話し手の発話を受けて発するあいづちの「あ」に焦点を当て、会話の中でどのような機能を持つのかを明らかにする。

2. 「あ」の機能に関する先行研究

2. 1. あいづちの観点から分析された先行研究

あいづちの機能に焦点を当てた先行研究としては、松田（1988）、ザトラウスキー（1993）、今石（1993）、藤原（1993）が挙げられる。松田（1988）では堀口（1988）の「理解している信号」を細分化し、「話し手が伝えた情報の了解を伝える」ものとして、「ア、ソウデスカ」、「当初理解できなかったり、思い出さなかったことを、理解したり思い出したこと（知識の共有）を伝える」ものとして、「アア／ア、アア／ア、ソウカソウカ」を例に挙げている。ザトラウスキー（1993）では「承認の注目表示」の機能の中で「ああ、そうなんだ」、「興味・確認の注目表示」として「あっ、ほんと？」、「確認・終了の注目表示」として「あ、そっか、そっか」を例として挙げている。また、今石（1993）では「聞き手が話し手の情報伝達の意図を確定したことを伝える」ものとして「あーそうですか」を挙げ、藤原（1993）では「そう系」のあいづち表現を考察する中で「あ／あっ」を「気づき／驚き」の表示として取り上げている。

2. 2. 感動詞・間投詞／談話標識の観点から分析された先行研究

感動詞・応答詞／談話標識としての「あ」を取り上げたものとしては、森山

(1989)、田窪・金水 (1997)、須藤 (2001)、富樫 (2001, 2005)、西阪 (1997, 2001) がある。森山 (1989) では、聞き手の様々な応答を新情報に対してのものであるか、既知情報に対してのものであるかに分け、長音を伴う「あー」は、新情報の場合「聞き取り表示／ア系共通理解事項導入¹／驚き表示」という3つの機能を持ち、既知情報の場合「うん／はい／ええ」などと同じ「聞き取り表示」に入るとし、「あ」は新情報の場合のみで「驚き表示」になるとしている。田窪・金水 (1997) では感動詞・応答詞を心的な情報処理の過程が表出したものと捉え、「ああ (下降イントネーション)」は「相手の発話を入力した承認 (acknowledgement) の標識」としており、「あ／あっ」は「自分で発見した情報を新規に登録する際の標識 (田窪・金水 1997: 268)」と位置付け、「発見・思い出し」の機能になるとしている。同じように情報の獲得を示す談話標識²を心内の情報処理操作の表出と捉えて分析した富樫 (2001) では、「えっ／おっ」との比較を通して、「あっ」を「バッファ³にない新規情報を獲得したことを示す」ものとしており、富樫 (2005) では「驚き」を伝える際に用いられる「あっ」と「わっ」を比較し、「あっ」を「変化点の認識を示す」ものと結論付けている。また、西阪 (1997, 2001) ではHeritage (1984) の議論を受けて、change-of-state token⁴としての「あ」は「いまわかった」ということを示し、それはつまり「それまではわからなかった」ということも同時に示すと主張している。最後に、須藤 (2001) では、話し手発話終了後に現れる「あ」の音声的特徴が何を意味するのか考察し、社会的関係が「疎」の場合、比較的長さが短く、無音部分を伴う「あっ」が多く現れ、社会的関係が「親」の場合、「あー (ピッチ下降無)」や「ああ (ピッチ下降あり)」の比較的長いもの、そして「あっ」の短いもの両方が現れるとし、結果、「疎」の場合と比べると、「親」の方が「あー／あっ」の両方が使えるため、制約が少ないと報告している。

2. 3. 先行研究のまとめと問題点

上記の「あ」に関する先行研究をまとめると、まず、あいつちの観点から分析された先行研究では、「あ」の機能として、話し手の発話を受けて理解したことを表す「理解／承認の表示」、話し手の発話内容に対する「興味／確認／気づき／驚き」が挙げられている。しかし、分析はあいつちにはどのような機能があるかという観点からされているため、あいつちとして使用される「あ」の形式に焦点を当て、詳しく考察している研究はほとんど見られず、「あ」を取り上げていても多くは「あ」にその他の形式が付随したものを例として挙げ、「あ＋他の形式」で1つの機能としているため、「あ」の特徴を明らかにしているとは言えない。一方、感動詞・応答詞／談話標識の観点から分析された先行研究を

まとめると、「あ」の機能として「新規情報の獲得」、「発見・思い出し」、「驚き」、「変化点の認識」が挙げられ、その他の特徴として、話し手の発話の情報の性質（聞き手にとって新情報であるか既知情報であるか）、社会的関係によって「あ」の示す機能や使われ方が変わるとまとめることができる。しかし、森山（1989）、田窪・金水（1997）、富樫（2001, 2005）の分析は、作例による独り言の1文や対話であっても話し手の発話と聞き手の応答のみであるため、「あ」が実際の会話の場面で上記で挙げた機能を持ちうるのか、その検証はされていない。

以上の「あ」に関する先行研究の問題点をまとめると以下の2点が挙げられる。

- ①「あ」が、単独で現れる場合だけでなく、他の形式と同時に現れる場合も一緒に分析されているため、数多くの機能が認定されており、「あ」の形式が持つ独自の機能が何であるか曖昧である。
- ②作例による分析のため、認定している「あ」の機能が実際の会話で現れるのか、その検証が行われていない。

3. 調査概要

3. 1. 被験者

本稿における分析対象は日本語母語話者（以下NS）の1対1の対面自由会話10組で、各組30分程度、撮影・録音したものを分析した。被験者は初対面であり、20代前半、大学（院）生とした。年齢、身分をあわせた理由としては、黒崎（1987）で年齢（世代）によって、あいづちに差があると報告されており、また須藤（2001）では社会的関係によって「あー」と「あっ」の使用の違いがあるという報告がされているため、それらの違いによるあいづち使用の差異を避けるためである。

3. 2. あいづちの定義と分析の範囲

あいづちの定義については、堀口（1997）、松田（1988）、ザトラウスキー（1993）、メイナード（1993）を参考に、「聞き手が話し手の話を継続させるために、話し手の発話権を取ろうとしないで発する新しい情報提供を伴わない短い表現で、話し手に聞き手の発話に対する応答を求めないもの」とし、認定作業を行った。なお、あいづちには、聞き手が発話権を取得する際に発するあいづち的な発話も広義のあいづちとして認定している先行研究⁵もあるが、本稿

では対象外とした。

4. 「あ」の機能

あいつちとして用いられる「あ」はどのような機能を持つのであろうか。本稿では「あ」の機能として、「新情報の獲得」と「同調」の2つを提示したい。

・「あ」の機能 —新情報の獲得—

会話例2：カナダに旅行したときにできた友人についての話（NS-B/NS-F）

- 1 NS-F： あたし(.)この前(.)カナダに春休みに遊びに行ったんですけど
[:その]ときに:ブラジル(.)と:メキシコとか[の子と
- 2 NS-B： [うんうん [ふ:ん]
- 3 NS-F： 友達になって:あたしたちは:普通に:英語を第2言語でやってるじゃない[ですか:
- 4 NS-B： [あっはいはい.
- 5 NS-F： だけど:その:ブラジルとかってというのは:
[ブラジル]:は結構
- 6 NS-B： [う:ん.]
- 7 NS-F： 移民の国で
[イタリアから] 来てる人が多くって [知ってますか?
- 8 NS-B： [う::ん.] [あ::
- 9 NS-F： それとかって. =
- 10 NS-B： =あ:全然(.)それは知らなかったです.

会話例3：大学での専攻についての話（NS-A/NS-D）

- 1 NS-D： 大学:とか院とかでは何を勉強されてるんですか?
- 2 NS-A： 僕?僕はね(.)英語教育
[::] を勉強して(.)英語教育の中でもも(.)
- 3 NS-D： [あ]
- 4 NS-A： もともと:言語学:を勉強してて[:
- 5 NS-D： [はい
- 6 NS-A： で(.)ちょっとすごい(.)先生がいて:その人についていこうって感じで:そのまま:院に入っても言語学を勉強してる[.(.) 感じで.(.)
- 7 NS-D： [へ:::

会話例2はNS-Fがカナダに旅行に行ったときに知り合った友人について話している場面であるが、5、7でNS-Fが「ブラジル：は結構移民の国でイタリアから来てる人が多くって」と発話したところで、NS-Bは「あ：：」とあいづちを打っている。その後にNS-Fの「知っていますか？」という質問に対して、NS-Bが「知らなかった」と言っていることから、この場面で使われている「あ：」は「ブラジルは移民の国でイタリアから来てる人が多い」というNS-Fの発話内容がNS-Bにとって新情報であり、納得や同意などではなく、話し手の発話内容を理解し、新情報を獲得したという表示であると考えられる。同様に、会話例3でも1で「何を勉強されてるんですか？」と質問していることから、NS-Aの専門についてNS-Dはまったく知らなかったことがわかる。そのため、NS-Aの「英語教育」という発話後のNS-Dの「あ」は新情報の獲得の表示であると解釈できる。

このように「あ」には元々の情報がない状態での新情報の獲得の機能があることがわかる。

・「あ」の機能 一同調一

会話例4：ジャージでコンビニに行くことについての話 (NS-A/NS-F)

- 1 NS-A： なんつ：の(.)そこまでもう(.)あんまり(.)気：使わんくなつたでしょ [：あの：－
- 2 NS-F： [あもう全然使わないですよ.]
- 3 NS-A： う：ん(.)ね(.)あれちょっとなんつ：のうちのこう：年を取ったって感じなのかな？
- 4 NS-F： う：ん(.)[そうね.]
- 5 NS-A： [コンビニ行くとときとかね(.)だって僕大学1年のときとかやっぱ恥ずかしかったもんジャージで行くとか.]
- 6 NS-F： あ：
- 7 NS-A： 僕がジャージで [()]
- 8 NS-F： [それはある]かも(.)大学生は行っちゃいけないとかちょっと思った。
- 9 NS-A： hhh
- 10 JNS-F 普通に行きますねジャージで。
- 11 JNS-A 授業とかもジャージで出る？

会話例5：転校先での友達についての話（NS-A/NS-E）

- 1 NS-E: でもたまに：やっぱ気に入らない(.)と思ってる子とかいるじゃないですか；
- 2 NS-A: あほんと：[>それでも] どこ [でもいる. <]
- 3 NS-E: [そう:] [なんだよ]あの転校生
みたいな.
- 4 NS-A: あほんと [:::うん.]
- 5 NS-E: [とか>たまに] いるじゃない
です [かそう] いうのはちょっとやだけどく；
- 6 NS-A: [うん]
- 7 NS-E: うん (.) すごく陰で悪口言われたりも [するけど:]
- 8 NS-A: [あ:あ:]
- 9 NS-E: でも：大丈夫° みたいな°.
- 10 NS-A: へ:::.

会話例4はジャージでコンビニに行くことについて話している場面であるが、1でNS-Aが今では服装に気を使わなくなったか聞き、NS-Fが「使わない」と返答した後、3で服に気を使わなくなったのは年を取ったからかと質問し、NS-Fは4で同意している。そして、NS-Aが「大学1年の時とかやっぱ恥ずかしかったもんジャージで行くとか」と発話したところで、NS-Fは「あ:」とあいつちを打っている。この場面では、その後にNS-Fが「それはあるかも」と発話し、続けて、以前は「大学生はジャージでコンビニに行ってはいけないと思っていた」と主張していることから、「ジャージでコンビニに行くことが恥ずかしい」ということはNS-Fにとって元々の知識がない状態での新情報の獲得ではなく、5のNS-Aの発話について理解し、「あ:」と同調していると考えられる。また、会話例5は転校後、快く受け入れてくれる人だけでなく、そうではない人もあるということについて話している場面である。3で「なんだよあの転校生みたいな」とNS-Eが転校先で快く受け入れてくれない人もあるということを話し、その後、7で「陰で悪口言われたり」とどのような扱いをされるかについて具体例を挙げ、そこでNS-Aは「あ:あ:」とあいつちを打っている。「学校などで生徒が陰で悪口を言う」ことについて、NS-Aはまったく知識がなく、この場面で初めて知ったということは考えにくい。そして、2でNS-AがNS-Eの「気に入らないと思ってる子とかいる」という発話に対し、「それでもどこでもいる」と述べていることから、この場面においては「そういうこともある」とNS-AがNS-Eの発話に対して「あ:あ:」と同調していると考えられることができる。

このように、「あ」には、文脈、あるいは自らの経験・既有知識から話し手の発話内容・意図を理解し、「わかる／わかった」という同調を示す機能もあることがわかる。

以上、あいづちとして用いられる「あ」の機能として、「新情報の獲得」と「同調」の2つを挙げた。これら2つの機能は、前述したとおり特徴は異なるが、Heritage (1984) で提出されているchange-of-state token (知識・認識状態の変化の表示:筆者訳責) という点では2つの機能は共通している。つまり、「新情報の獲得」は情報(知識)がない状態からある状態への変化、「同調」は話し手の発話内容・意図を理解していない状態から理解し、話し手の発話内容・意図へ同調する状態への変化であると考えられ、新情報の獲得も同調もchange-of-state token (知識・認識状態の変化の表示) という点では一致していることがわかる。その点を考慮に入れて考えると、話し手の発話を受けて、聞き手が発する「あ」は聞き手の内部でchange-of-state (知識/認識状態の変化) が起きたことの標示であり、その機能として「新情報の獲得/同調」があると考えられる。

5. 「あ」の特徴－付加機能－

「あ」は単独では、「新情報の獲得/同調」の2つの機能であるが、「あーそうですね」「あなるほど」など「あ」と他の形式を組み合わせることによって「新情報の獲得/同調」という機能に様々な機能を付加して、心的態度を表示することができる。その例として5節では、「同意/気づき/了解・理解/驚き」の4つの例を取り上げ、提示する。

会話例6：海外での語学研修についての話 (NS-A/NS-C)

- 1 NS-C: けっこう(.)えあ(.)外国とかにも行ったりするんですか?
- 2 NS-A: うんちょっとね[.] 2ヶ月くらい前にちょっと行ってた[シドニー]
- 3 NS-C: [うん] [へ:]
- 4 NS-A: オリンピックに[ちょう] どの行ってた＝
- 5 NS-C: [あ:] =え何やってたんですか? ホームステイ?
- 6 NS-A: ホームステイじゃないあの:－
- 7 NS-C: ボランティア?
- 8 NS-A: うううん(.)いや普通の語学学校行き [なが] ら:あの:
- 9 NS-C: [あ:]

- 10 NS-A : ドミトリーに [(.)に] 住んでて [:で]
 11 NS-C : [あ:] [へ:]
 12 NS-A : もそうするとでもやっぱね
 周りが日本人ばっか [りなんだよ:
 →13 NS-C : [あ: そうですね
 14 NS-A : うん: ほんと日本人ばっかでなんか:
 中略
 15 NS-C : そあたしも: この(.) 6 月(.)と 5 月: に 2 週間だけ: (.)
 ニュージーランドに行ってたんですよ
 [(.)ホームステイでhh=
 16 NS-A : [あ: =あほんと:
 17 NS-C : うん学校さぼって [hhh
 18 NS-A : [hhhそれもなんかすごい [ねhh
 19 NS-C : [うんhhで(.)
 でもそこでも(.)日本人(.)あたしが行ったときはすごい変
 な時期だったから
 [:日本人(.)がすごい<少なくって>よかったんです
 20 NS-A : [うん
 21 NS-C : けどでも(.)友達とかみんなやっぱり夏休みに
 [:カナダとか:
 22 NS-A : [う: ん
 23 NS-C : う: ん(.)ニュー: んオーストラリアとか行って: 日本人だ
 らけて言っていました

会話例 6 はNS-Aが行った語学研修について話している場面である。NS-Cが外国に行ったことがあるかNS-Aに聞き、NS-Aはシドニーオリンピックに行っていたと返答し、その後、NS-Cが再度何をしていたか聞き、NS-Aは語学学校に通いながらドミトリーに住んでいたと返答している。そして、NS-Aが12で「周りが日本人ばかりなんだよ」と発話し、その発話に対して、NS-Cは「あ: そうですね」とあいつちを打っている。この場面の後の発話でNS-C自身も海外に語学研修に行った経験があり、21、23で語学研修で行く学校は日本人が多いという情報については友人から聞いたと述べていることから、13の「あ: そうですね」はNS-Aの発話に同意していると解釈できる。

会話例 7：海外旅行についての話 (NS-B/NS-C)

- 1 NS-C： どこに行ったんですか？
- 2 NS-B： え：っとね(.)ん：っと(.)大学生の間は：んとシンガポールとか [：
- 3 NS-C： [あ：
- 4 NS-B： 台湾とか [：(.)] あとそうですね韓国も何回か行って [：
- 5 NS-C： [うん] [h
何h回hかhh
- 6 NS-B： そうなんですよ
[：結] 構好きで [：う] ちからも(.)結構近くていき(.)
- 7 NS-C： [うん] [あ：]
- 8 NS-B： 行きやすいんですね＝
- 9 NS-C： ＝あっそうなんですか？
- 10 NS-B： う：ん
- 11 NS-C： ふ：[ん
- 12 NS-B： [近い(.)というと(.)なんかあれです
[けど：まあ] 東京まで(.)行くの
- 13 NS-C： [うんhh]
- 14 NS-B： と[(.)]おな(.)[同じかそ]れよりも短いくらいで行っちゃうんですよ
- 15 NS-C： [うん] [あそっか]

会話例 7 は今までに旅行に行ったことがある国について話している場面である。NS-CがNS-Bに今までにどの国へ行ったことがあるか聞き、NS-Bはシンガポール、台湾、韓国を挙げている。そして、5でNS-Cが「何回か」と反応したためNS-Bは話題を「韓国」に移し、韓国について結構好きで、近くて行きやすいと述べているが、それに対してNS-Cは「あっそうなんですか？」と「近くて行きやすい」ことについて確認を行っている。その後、NS-Bは例を挙げ、「東京まで(.)行くのと(.)おな(.)同じ」と発話したところで、NS-Cが「あそっか」とあいづちを打っている。NS-Cも海外旅行に何度か行っている話をこの場面の後にしており、名古屋から韓国までの時間と東京までの時間は距離的観点からも大体同じであることを知っていたと推察できる。そのため、この場面ではNS-Bが韓国は近いという主張をし、「東京まで行くのと」と例を挙げた時点でNS-Cは名古屋から韓国までの距離がさほど遠くないことに気づき、あいづちを打っていると解釈でき、15の「あそっか」は「気づき」の表示として機能していると考えられる。

会話例8：大学を決めた理由についての話（NS-B／NS-D）

- 1 NS-B： 家が近いからですか？な(.)[名古屋に＝
 2 NS-D： [そ ＝そうですね；
 3 NS-B： ふ：[ん
 4 NS-D： [まず農学部に行きたいなとは思ってて
 [：(.)で(.)まあの：
 5 NS-B： [ふ：ん
 6 NS-D： 農学部ってあんまり(.)数が(.)ないんですよ<全国>
 [でも(.)はい
 7 NS-D： [あ：そうですね：[そうですね：ふ：ん＝
 8 NS-D： [で ＝でまあたまた
 まN大にあるし：[：と思って
 →9 NS-B： [あ(.)そっかそっか

会話例8はNS-Dが現在の大学を決めた理由について話している場面である。

1でNS-Bが「家が近いからですか？」と質問した後、NS-Dはそれに同意し、4で農学部に行きたいと思っていたと別の理由を説明し始めている。そして、農学部は全国にあまりないというNS-Dの発話にNS-Bは7で「あ：そうですね」と同意し、その後、「たまたまN大にあるし：」とNS-Dが発話したところでNS-Bは「あ(.)そっかそっか」とあいづちを打っている。この場面ではNS-BがNS-Dに大学を決めた理由を質問しているため、理由を聞く側であり、その理由が明らかになった場合は了解・理解（あるいは納得）の表示、わからない場合は再度質問するなど、NS-Dに対して何らかの反応を返す義務が生じる。そして、NS-Bが、大学が家から近いこと、農学部は全国であり数がないことを発話し、最後に「たまたまN大にあるし：」と発話されたところで理由が確定したため、9でNS-Bは「あ(.)そっかそっか」とあいづちを打ち、了解・理解したと表示していると解釈できる。

と：」と2度繰り返していることから、NS-Dは大学1年生であるにも関わらず、すでにやりたいことが決まっていることにNS-Aは驚いており、「あ：ほんと：」は「驚きの表示」として機能していると解釈できる。

以上のように「あ」は他の複数の形式と結び付くことによって、様々な機能を持つことがわかる。ここで挙げた例はわずか4例であるが、その他にも様々な形式を付け加え、様々な機能を表明できると思われる。

そして、上記の4つの会話例で「あ」に付随する他の形式を除き、単独で現れると仮定した場合、会話例6、7は「同調」、会話例8、9は「新情報の獲得」となり、同意、気づき、了解、驚きなどの機能として解釈することは難しいことがわかる。これに関しては、会話例で出せなかったが、先行研究で挙げられているその他の機能（発見／思い出し／興味／確認／承認）についても同様のことが言えると思われる。つまり、先行研究で松田（1988）では「理解したり思い出したこと（知識の共有）を伝える」ものとして「ア、ソウカソウカ↓」を挙げ、ザトラウスキー（1993）では「承認の表示」の「ああ、そうなんだ」、「興味・確認の注目表示」の「あっ、ほんと？」を挙げているが、それらの機能は「あ」に「そうか／そうなんだ／ほんと？」が後続しているからこそ持つことができるのであり、「あ」の本質的な機能ではないと考える。会話例6－9で見てきたように、聞き手が「あ」を単独で用いた場合、新情報の獲得、同調を表す以上のことは難しく、必要に応じて「あ」にその他の形式を付加し、話し手の発話に対してどのように考え、感じているか、心的態度を表明していると思われる。

6. まとめと今後の課題

本稿では会話の中であいつちとして用いられる「あ」の機能について考察を行った。先行研究では「あ」の機能は細分化され、様々な機能がそれぞれ独立した機能として挙げられていたが、「あ」の後に付随するその他の形式を除き、会話例を基に再考すると、「あ」はchange-of-state token（知識・認識状態の変化の表示）という話し手の発話を受けて、聞き手の知識・認識の状態が変化したことを表す標示であると考えられ、その基本的な機能としては「新情報の獲得／同調」の2つにまとめることができる。そして、「あ」に他の形式を付随させることによって、様々な機能を付加し、話し手の発話に対する聞き手の考えや認識などの心的態度を表明できることを本稿では提示した。以上の「あ」についてまとめると、以下の図1のようになるとと思われる。

【 図1 あいづちとして用いられる「あ」の機能と付加機能 】

「あ」の機能	付加機能
change-of-state token (知識・認識状態の変化の表示) { ・新情報の獲得 + ・同調 }	了解／承認 (例：そうですか など) 納得 (例：なるほど など) 同意 (例：そうですね など) 興味 (例：へー など) 驚き (例：本当に など) 気づき (例：そっか など) ⋮

付加機能については、必ずしも例で挙げている形式が1つの機能を示すというわけではない。例えば、「あーそうですかー」と聞き手が話し手の発話を受けて発話した場合、「了解」を表す場合もあれば、「興味・関心」を表す場合もあると考える。前後の文脈や話し手との相互行為によって、聞き手はその場その場で形式を選択し、様々な付加機能を表明していると考ええる。

今後の課題としては、「うん／はい／ええ」や「ふーん／へー」などの他の形式のあいづちの機能を明らかにし、それらの使用の差異を明らかにすることが挙げられる。あいづち研究では、あいづちという行為にどのような機能があるかということが中心に分析されており、あいづちの個々の形式がそれぞれどのような機能を持っており、どう異なるかについてはほとんど明らかになっていない。日本語学習者のあいづちの使用や、学習者へのあいづち教育の実施と効果に関する研究は数多く報告されているが、その根本となる個々のあいづちの形式の機能・使用実態を明らかにすることは急務であると考ええる。

注

1. 森山 (1989: 81) では「未知の情報であっても一種共感的に導入されるもの」で、「予測可能な新情報導入である」としている。
例：あ、雨が降っているよ。→ああ。(予報などで予測：＝ソウカ／キアッ)
2. 富樫 (2001) では談話標識をSchiffrin (1987) などで挙げられている談話上で文脈と結びつくことによって様々な機能を果たすdiscourse markerとしてではなく、「心内での情報処理を示す」ものとして捉えている。
3. 定延・田窪 (1995) では「様々な情報を貯蔵し、また必要に応じて情報の検索や計算を行うための心的作業領域」と定義しており、富樫 (2001, 2002

- b) では「情報の逐次的な処理を行う作業領域（富樫2001:24）」、「話題となっている情報、あるいは前提となっている情報が存在する／活性化した情報が格納される（富樫2002b:103）」所と説明している。
4. Heritage (1984) では英語のohをchange-of-state tokenと捉え、「the particle is used to propose that its producer has undergone some kind of change in his or her locally current state knowledge, information, orientation or awareness」と述べており、西阪（1997）ではchange-of-state tokenを「状態変化標徴／知識状態変化の標識」と訳している。
 5. Clancy et al. (1996) では、聞き手が発話権を取得する際に発する短いあいつち的な発話を「再開的な型 (resumptive opener)」と聞き手の反応 (reactive tokens) の1つとして認定している。
 6. 小宮（1986）では「はい／えー／ん」などの感声的で概念を示さない表現を「感声的表現」としてまとめ、ハ系、エ系、ア系、ン系、その他に分けている。例えば、「あ」「あー」「あーあーあー」などの「あ」を含む表現はア系に入る。

トランスクリプトの記号

会話資料中に使われている記号については、会話分析の分野で使われているトランスクリプトの記号を用いて表記した。本稿で用いた記号を以下に記す。

[… 発話の重なるの開始] … 発話の重なるの終結
(.) … 0.2秒未満の間隙 (数字) … 数値の秒数の間隙	= … 言葉と言葉、発話と発話が途切れていない部分
° ° … 発話音量の低下	: … 音の引き伸ばし
h … 呼気音（笑いも含む）	? … 上昇調の抑揚
.h … 吸気音（笑いも含む）	. … 下降調の抑揚
> < … 発話速度上昇	, … 継続を示す抑揚
< > … 発話速度減少	↑ ↓ … 急激な音調の上下
— … 大きな音、または強調部分	() … 聞き取り不可能
— … 直前の語や発話の中断	(()) … 注記

参考文献

- Clancy, P. M., Thompson, S. A., Suzuki, R. & Tao, H. (1996). The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics*, 26 : 355–387.
- 藤原真理 (1993). 対話における相づち表現の考察「そうですか」「そうですね」等を中心に. 『東北大学文学部日本語学科論集』 3 : 71–82.
- Heritage, J. (1984). A Change-of-State Token and Aspects of its Sequential Placement, in J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 堀口純子 (1988). コミュニケーションにおける聞き手の言語行動. 『日本語教育』 64 : 13–26.
- (1997). 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版.
- 今石幸子 (1993). 聞き手の行動—あいづちの規定条件—. 『阪大日本語研究』 5 : 95–109.
- 小宮千鶴子 (1986). 相づち使用の実態—出現傾向とその周辺—. 『語学教育研究論叢』 3 : 43–62.
- 黒崎良昭 (1987). 談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言について—. 『国語学』 150 : 122–109.
- 松田陽子 (1988). 対話の日本語教育学—あいづちに関連して—. 『日本語学』 7 (13) : 59–66.
- メイナード・K・泉子 (1993). 『会話分析』 くろしお出版.
- 森山卓郎 (1989). 応答と談話管理システム. 『阪大日本語研究』 1 : 63–88.
- 西阪仰 (1997). 『相互行為分析という視点』 金子書房.
- (2001). 『心と行為—エスノメソドロジーの視点 (現代社会学選書)』 岩波新書.
- 大浜るい子・山崎深雪・永田良太 (1998). 道聞き談話におけるあいづちの機能. 『日本語教育』 96 : 73–84.
- ポリ－・ザトラウスキー (1993). 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』 くろしお出版.
- Schegloff, E. A., Jefferson, G. & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53 : 361–382.
- Schiffrin, D. (1987). *Discourse markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

- 須藤潤 (2001). 感動詞「あ」の音声的特徴と会話参加者間の社会的関係. 『日本語・日本文化研究』11: 117-128.
- 田窪行則・金水敏 (1997). 応答詞・感動詞の談話的機能. 音声文法研究会編『文法と音声』257-279. くろしお出版.
- 富樫純一 (2001). 情報の獲得を示す談話標識について. 『筑波日本語研究』6: 19-41.
- (2002). 談話標識「ふーん」の機能. 『日本語文法』2 (2): 95-111.
- (2005). 驚きを伝えるということー感動詞「あっ」と「わっ」の分析を通じてー. 『活動としての文と発話』ひつじ書房.

(名古屋大学大学院・日本学術振興会特別研究員 古川智樹)